

大槌刺し子プロジェクト (岩手県大槌町)



一針ずつ丁寧に作業する女性ら (11月22日、岩手県大槌町で)

2011年の東日本大震災で被災した大槌町の女性たちによる伝統手芸「刺し子の制作を通して、作り手の居場所づくりや文化の継承を目指す。全国各地の事業者と共に商品開発を行い、一針ずつ丁寧に作った製品が人気を博している。刺し子は、重ねた布を細かく縫う東北地方の伝統技法。震災直後の11年5月、避難所でも作業できるように通じて、被災した高齢

伝統手芸 刺し子継承

女性の生きがいづくりにつなげる活動が始まり、同年8月から海外へ災害支援活動を展開する「認定NPO法人テラ・ルネッサンス」(京都市)が運営する「刺し子」の制作を通して、作り手の居場所づくりや文化の継承を目指す。全国各地の事業者と共に商品開発を行い、一針ずつ丁寧に作った製品が人気を博している。刺し子は、重ねた布を細かく縫う東北地方の伝統技法。震災直後の11年5月、避難所でも作業できるように通じて、被災した高齢

NPO法人いこいの家夢みん (横浜市戸塚区)



ピアノの伴奏で合唱する「歌声喫茶」の参加者たち (11月20日、横浜市戸塚区で)

横浜市戸塚区約2,000戸が集まる大型団地「リムハイム」で、高齢者の交流や生活支援などに取組む「いこいの家夢みん」が、幅広い世代の住民が楽しめる拠点「みんなの居場所」夢みんカフェ」も新設した。活動の始まりは、有志が法を設立する前の1999年、6年に団地の1戸を借りて開いたサロン。「高齢者の居場所がほしい」との要望

高齢化団地に「居場所」

を受けたいが第一歩となった。その後介護予防など活動を開始し、2014年に団地内の空き店舗に拠点を移した。現在は歌声喫茶、パソコン教室、健康体操など多彩なプログラムを年間700日以上開催している。買い物や外出しなを住居が支援する「ボランティアバンク」も運営する。団地は唐開始から半世紀ほど、住民は高齢化、活動の担い手の中心も高齢代になった。若い世代にも輪に参加してもらおうと開いたのが夢みんカフェ。夢みんカフェは、資金をやり取りする、別の空き店舗を借り受けた。伊藤隆知子理事長(73)は「新たな挑戦をするなら今しかない」と決断し、法を設立する。現在は居場所の提供を中心に、新しい居場所づくりを進める。(横浜支局・村尾浩)

社会福祉法人 まるこ福祉会 (長野県上田市)



施設内のホールでボッチャを楽しむお年寄りたち (11月17日、長野県上田市で)

相談相手、余暇も充実

東日本大震災での支援活動を支援し、高齢者も交流して地域住民が高いに支え合おうと、運営する福祉施設のスタッフが中心となって活動を行っている。障害者も高齢者も「あったら誰でも会話が楽しめる」環境作りを努めている。平均年齢が75歳という地元の高齢者有志30人が2015年、ボランティア団体「チームあったらいい輪」を設立し、高齢者重視の活動を本格化させた。16年には施設内に「サロンあったらいい輪」を開設。毎週月1金曜日の3人のボランティアのお年寄りが交代で、高齢者、不登校の児童・生徒や保護者との相談相手となっている。最近長年ボランティアの水津江さん(87)は「生きがいを感じながら活動している」と笑顔で話す。家庭内の問題が解決し、子供が学校に復帰するといった効果も出てきた。施設のホールでは、ボッチャの講座をはじめ、講演会やコンサートを開き、高齢者に開放的月替わりの写真展や絵画展を開くなど活動の輪が広がる。柳沢正敏理事長(73)は「今後とも高齢者を重視した事業を充実させたい」と将来像を見据えている。(長野支局・浅野好香)



読売福祉文化賞 第21回 受賞6団体

【一般部門】

今の時代に求められる福祉活動を実践している団体や個人を顕彰する「読売福祉文化賞」の受賞団体が決まった。今年で21回目を迎える「一般部門」の不登校の若者の自立支援のためのフリスティックを運営し、就業支援の場を提供する「NPO法人With(山形県米沢市)」など6団体、高齢者福祉部門で高齢化率の高い大槌町集会所で、長年にわたる高齢者のための交流サロンを運営し、介護予防プログラムやランチを提供している「NPO法人いこいの家夢みん」(横浜市)など6団体が選ばれた。読売新聞東京本社内で11日に表彰式が行われ、受賞団体に対して活動金として100万円が贈られる。福祉の現場から時代に合った活動を紹介します。

NPO法人 With(山形県米沢市)

山形県南部の置賜地域を中心に、不登校を抱えている若者の支援に取り組む。若者の自立を助けける就労トレーニングの店や、フリースクールを運営している。米沢市内の小学校で支援員として勤務した代表の白石洋和さん(41)が、地元を白鳥と民11人とも2019年にフリースクールを設立したのが始まり。最初は不登校の子どもの学習支援が主だったが、スクール卒業後の就職に苦戦する生徒が多かったため、就労支援にも活動を広げた。「失敗してもいい」「いつでも挑戦できる」職場を目指し、活動に理解のある人が利用できる会員の居酒屋やカフェを13年以降に開設。働きにくい不安のある若者を受け入れ、接客などを学んでもらいながら、社会に「一歩を踏み出す



団体が運営する居酒屋で就労経験を積む若者 (左端) (11月22日、山形県米沢市で)

若者手助けし就労の道

後押しをしている。現在、引きこもっていた人や、不登校の若者が短期滞在できるような「海の家」を同県鶴岡市で作ろうと、クラウドファンディングを募っている。白石さんは、受賞を励みに更に挑戦していきたい。福祉制の活動はさまざま支援を受けられず「苦しんでいる人たちを、これかも地域全体で支えていかなければ」と話している。(山形支局・中戸穂)

CINEMA Chupki TABATA (東京都北区)

目や耳の不自由な人、大音量や暗闇が苦手な感覚過敏の人、そして赤ちゃんと一緒に楽しむ人など、多様なニーズを考慮して映画を上映している。代表の平塚千穂子さん(51)は、映画を楽しむために「3Dは映画を楽しむために」という視覚障害者の声を聞き、2001年から音楽ガイド付きの映画鑑賞会を始めた。すると、一緒に鑑賞した映画の感想を家族と共有できた感動で泣く姿や、映画という楽しみをきっかけに、引きこもりがちだった生活を抜け出した人の姿を自らの当たりとした。 「文化芸術を楽しむ場所」に障害者が当たり前にならなければならない。平塚さんは「日常の中で知り合う」と、障害者の暮らしを人ごとではなく自分ごととして捉えられようになるはず。そのきっかけ作りにも取り組むたい」と話している。(社会部・中村佳)

映画の感動を誰にでも



障害の有無は関係なく、誰もが楽しめる映画館「シネマ・チュウキ」内で話す平塚さん (11月24日、東京都北区で)

NPO法人 ChanChan 夢企画 (北九州市小倉南区)

知的障害のある人々が演じる「ChanChan 夢企画」を運営する。発足30年を迎えた劇団は「個性をみかけ」ば誰もが主役をモットーに北九州市内外のほか、韓国、台湾など海外でも公演表現活動を通して障害者の社会参加を促している。劇団は1993年、元特別支援学校教諭で校長の神田美奈子さんの「それが持つ個性を魅力として表現できる場所を一緒につくりたい」と、教えずら19人と旗揚げした。当初は既存の物語を演じたが、決められた動きやセリフを習得して演じる劇団員もいた。一掃にはあらずと、その延長線上で2015年目からオリジナルの脚本をスタッフが考案。個人の特長に合わせたセリフの内容を変え、発音が難しくても動きやダンスなどで表現できるよう工夫する。現在の団員は20~40歳の



定期公演に向けて練習に励む劇団員さん (11月10日、北九州市)

知的障害者「主役」の劇団

34人。毎年12月の定期公演では2日間を計1,000人以上の観客を集める。11月5日は隔週1回、定期公演半年前の6月からは週1、2回の稽古を重ねる。劇団員は全国区の劇団にすることを目標に掲げ、「障害を理由に社会参加を躊躇うようになっている人たちの背中を押せる存在にしたい」と話している。(北九州総本部・牟田口寛)

時代に即した いこいと交流

- 【選考委員】(敬称略) 安藤謙太 東京ボランティア・市民活動センターアドバイザー 栗原小巻 女性 シニア社会学会会長 相井孝子 高木憲司 和洋女子大学准教授 馬場 満 日本福祉文化学会副会長 保高秀昭 読売新聞東京本社編集委員